

羽子板

皆川美恵子

『羽子板』と題された、羽子板については歴史といい、製作方法といい、羽子突き唄といい、その関係するところ多くを記述し、写真、図版を豊富に付して一卷とした書物がある。著者は山田徳兵衛氏で、浅草橋吉徳の現会長である。昭和十二年の、「どこやらで、夜、羽子をつく音」が耳にとどく暮に、芸艸堂より上梓されている。当時、限定千部のこの繊麗な本は、暫くして起る戦禍を潜り、今や稀覯本となっている。

羽子板について何か言う時、人はまずこの『羽子板』を手に執り、丹念に眺めるようだ。玩具辞典の類の羽子板の説明は、山田徳兵衛氏の探索の労に拠っている。この探訪記事を取材し、一文をまとめるにあたり、わたしはまず『羽子板』の借覧と羽子板製

作者の紹介とを山田徳兵衛氏に懇願した。氏は篤実温厚のお人柄から快く承諾してくれた。明治二十九年生れの山田氏は現在八十三歳。『羽子板』は二十代の後半から十年余を費やし、全国に羽子板を尋ね歩き、御自分で写真を撮りなどしてまとめた御本という。

『羽子板』の本を先程わたしは繊麗と述べたが、中央から上を水浅葱、下を白に染め分け、状異なる三種の羽子を、朱、緑の色を少し配し薄墨で描きあげたうつくしい布の装幀である。この意匠を手がけたのは、人形収集や研究で名高い日本画家の西沢笛畝氏である。ちなみに笛畝氏は、本誌創刊号表紙を考案した荒木十畝氏と同門で、荒木寛畝氏の弟子という。

さて『羽子板』の頁を繰ると、倉橋惣三先生が序を寄せておられた。紹介してみると、

「日本人はえらい。子どもが戸外の遊びに使ふ一枚の板切れをさへ、こんないい形に型どり、こんな豊富な趣味に飾る。私は羽子板を見る時いつもそう思ふのである。木の実に鳥の羽毛を植えて浮力をつける工夫までは、他の国にもあることとして、その板に特に桐を用ひ、それをまた綿を包んだ絹の押絵の浮きばりにするに至っては、何んといふこまかな気の入れ方であらう。あの重くない重み、あの響かない響き、それは、手にも耳にも、一種独特の、ふつくらとした柔い快感を興へて、この遊びの興趣を完成させてゐる。」

と述べられ、続いて羽子板一枚に周到な心を使うことは、「大人が子どもに先んじて楽しんでゐるのである。子どものためだから自分達のためだから、区別のつかないいゝ心持になりきつてゐるのである。」とし、著者であり羽子板を商う山田徳兵衛氏に対し、「こゝろも念入りに美化して、自分が先づ楽しみながら子どもに与へて呉れた、大人の心入れの方への礼讃を以て序にかへる。」と感謝の気持を添えて結んでゐる。

● 押絵羽子板

山田徳兵衛氏は、押絵羽子板の製作者として高瀬弘巳氏を紹介してくれた。『羽子板』での永井周山はこの世に亡く、次の時代の名人桜井春山は病に倒れ、今は仕事を止している。高瀬弘巳氏は三十七歳、これからが期待される仕事熱心な押絵面相師である。

押絵羽子板で何が大事といつて、一番ものを言うのは顔であらう。目であらう。面相の出来が悪ければ誰も羽子板を買わない。面相師の伎量が羽子板を決めるのだ。面相師は絵師でもあり、浮世絵版画の下絵のような墨の線による白描の下絵を描く。この下絵をもとに型をおこし押絵が作られていくのだが、教ある押絵師のなかで、絵師として下絵まで描ける人は少なく、全国で八人位という。

高瀬さんは下絵を描くため古い羽子板を見て廻る。あるいは歌舞伎の舞台に足を向ける。新しい羽子板を作り出すため、自分の中に飛びこんでくるものとの出会いをひたむきに求めている。つまり仕事に気魄がこもってくる。苦心の下絵が柿渋を塗った和紙に描けると、厚紙（張蓋）に下絵の線をへらで写してゆき、その

線を切り、顔、手、道具、背景と三十幾余かの厚紙の型を作る手順となる。その型紙に布を合わせ、中に綿を入れ、縁を糊で貼ってゆく。そしてそれぞれのパーツをまとも上げていく。下絵にあわせて一片／＼を組み合わせ、裏から美濃紙を貼って全体を固め押絵の細工が完了する。

ここで顔の作り方の詳しい説明にとりかかってみよう。顔の型には絵絹を当て、中に綿を入れ糊づけしてくるみ上げる。その絵絹の上に絵具の滲みを防ぐため礬水（明礬をとかした水に膠液を加えたもの）をかけ、胡粉で地塗りをする。次に隈を置き、上塗りをかけ、日本顔料で目、口を描いてゆく。隈の入れ方、臉から目の描き方は、同色の濃淡で重ね描きし立体感を出していく。縹彩色の技法に適っている。こうした丹念な顔作りには二十五工程余はあり、羽子板作りの要となる。最後は黒く染めた生絲をふき、髪がのって押絵は完成する。あとは板屋さんから仕入れた桐板に押絵を載せ、固定させればよい。そして裏絵を描く裏絵師の手を経て羽子板となる。

高瀬さんは二代目の押絵師で、初代の父親辰美氏が戦争中浅草から疎開し、そのまま埼玉県の所沢に住みついた。所沢の地は今では羽子板の業者が多く集まり、押絵羽子板は県の伝統産業品に指定されている。

●かちかち羽子板

子どもたちが羽子を突く羽子板は、押絵羽子板というより街のおもちゃ屋で売られている安い羽子板だろう。押絵の美しさを鑑賞する力は、子どもたちにはまだ備わっていないように思われる。倉橋先生がいみじくも言うように、押絵羽子板は子どもに先んじて大人が楽しんで作り出したものにちがいない。子どもたちは入念な技をこらした高価な押絵羽子板は飾り置き、戸外においては安手の羽子板でこそ追羽子に興じたように思う。

柔い桐ではなく、固い朴の木で作られるそれら羽子板は、かちかちというかん高い音をたてることから「かちかち羽子板」と呼ばれたりする。児童文化探訪としては、子どもたちに身近なこの羽子板こそ取りあげるにふさわしい対象にはちがいない。東京では足立区に一軒のみこの羽子板を作っている人がいた。山本久光氏七十四歳、奥さんの花子さんと一年間に十萬枚の羽子板を作り、正月の子どもたちの許に贈り届けている。

電話で教わった通りに家を尋ね行くと、羽子板の上に「御用の方は呼鈴を」と書かれ、その羽子板は長年月のしるべを果したとみえ、黒ずみながら門扉にのどかにとまっていた。

山本さんのところでは、現在スクリーン印刷により羽子板を大量に生産しているが、以前は焼絵をやり、泥絵具による刷絵をやってきたという。焼絵羽子板は大正の初期に始まり流行をみた。

白金の針を用い、針の中で揮発油を燃やし高度の熱を起し、絵の輪郭線を焼き描いてゆく。焦げた輪郭線の中は、筆で彩色してゆく。戦後もこの焼絵羽子板を作っていたが、手数がかなり注文の数をこなせず、もっと簡単に、大量に、安く作れる方法がないかと思案をはじめた。まず思いついたのは、高野紙で型をとり、その型を羽子板の上に乗せ、泥絵具で刷り込むことだった。

ところが泥絵具で彩色した羽子板は、店に置いておくと、陽に焼け色が褪せ、大いに困ったらしい。高野紙による型紙もすぐ摩り切れる。そこでブリキで型をとり、その型の上からコンプレッサによりラッカーを吹きつけはじめた。この方法は材料のラッカーばかりを大量に要し、かえって高いものについた。こういう試行錯誤のち、十年程前に現在行なっているスクリーン印刷に到達した。

スクリーン印刷とは早く言えば謄写版印刷で、色の塗り分け部分により、色ごとの型をとってゆく。一つの羽子板には、顔や手の部分の白、輪郭線の濃茶、着物の緑・赤・黄・青・金、そして頬紅の牡丹など、約八通りの色を用いているが、それら各色の色

型を載せ一つ／＼刷り分けて絵柄が浮かびあがる。その型とは木枠に絹を張り、エスゾール、重クロム酸などの薬品で化学的処理を施し、絹目の密度で模様が作られたものである。普通、シルクスクリーンと呼ばれる。ラッカーにより絵が刷り終ると、尿素樹脂液を塗り、表面を固くすると共に艶を出し、雨に濡れても色落ちがしないよう仕上げる。

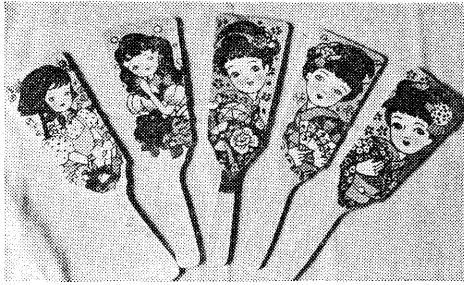
山本さんのところで作っている羽子板は、板の大きさ尺三、尺二、尺一、一尺、それに戦後の一時期ピンボンの流行で人気が出た、ラケットに似た丸型のもの大小である。それぞれの大きさは五種類の絵柄を用意している。三十の絵模様になるが、朴の木



▲ ラッカーインクによるスクリーン印刷

の他に、やや値のはる桐の羽子板も作っている。桐は尺三と尺二。そこで合計四十種類の絵模様となる。裏絵は大きさが一目でわかるように尺三には桜、尺二には梅、尺一は兔、一尺は犬の絵を刷っている。

値段は尺二を例にとると、朴の羽子板で卸が百円から百二十円、小売で三倍の三百円から三百五十円である。桐製は卸値が三百円、小売値が八百円から九百円となる。朴の三倍にする桐の羽子板は売れゆきが悪く、門屋でも多くは買ってゆかないという。



▲ 尺三の朴の羽子板

しかし朴の羽子板と桐の羽子板とを手にもつてみると、桐の材は柔かく、しっとり手に馴染み軽やかである。思わず羽子突き気分誘われる。

朴は現代風俗の洋服を着た少女二種と、和装の少女三種の図案となっている。それに対し桐は、桐材の風合

にふさわしく狂言物を題材とした童女が写されていた。背景に松が枝、波をあしらい、蛤模様の衣裳に身を包み、桶をもつ潮汲。桜吹雪のなか紅白の垂幕を背に、中啓の扇を手にする道成寺。柳がしなだれ、烏帽子姿が鼓を打つ朝妻。藤の枝を肩にかけ、赤い笠をかぶる藤娘。もう一つ、これは男の子に向けたもので巨人軍の選手がバットを構えている。左に構えているから王選手であろうか。「巨人はこの頃弱いからな」と山本さんは笑った。

さてここにもう一つ伝えることがある。山本久光さんは裏絵師として、その道で知られた方である。押絵羽子板の裏絵は、桐の継目をかくす巧みな一筆描きによっている。羽子板は一枚の桐板では反^そがくる。必ず何枚かの板を継いでいる。裏絵師は、継目を継目と見せないよう竹などを水墨でスッーと描いたりする。松竹梅が一番多いそうだが、表の狂言との取合で筆を入れてゆく。

山本さんは埼玉で生れ、東京の根岸で育つ。小学校の時から絵が好きで、学校を出て蒔絵師を志す。櫛、筭、盆、重箱などを手がけたが、絵の心得が大事と日本画を習い始める。師は関啓畝氏で荒木十畝氏の弟子という。十畝氏の画筋は山本さんの中にも流れていた。「啓畝先生は四十代の若さで惜しくも亡くなったけど、絵の上手な人だったよ。」と語る。先生の描いてくれた手本の画帖は三冊あったそうだが、戦争で焼き一冊だけが残ったという。

その貴重な一冊を取り出して見せてくれた。山本さんはいとおしむように一つ一つの絵を開ける。竹、梅、鳥、翡翠、鶏頭の花……。するどく、ゆたかで、気品があった。この手本を真似、家で一所懸命描いてゆき、先生に週一回の指導を受けたそうだ。その当時、日本画を習うものは四君子の附立から初めた。余事ながら附立とは下図を用いず、また輪郭線を描かず、サツと一筆描きすることをいう。即ち没骨である。手本を見ながら勢をこめて附立で描く、基礎を踏まえての修業をすること十年。山本さんは「今の人は、日本画やる人でも附立をやらないからねえ。名のある人でも色紙や扉面にサツと描ける人少ないねえ、」と言う。

関東大震災前のこと、蒔絵の仕事は夏、暇になるため、小田原の木工屋から来てくれないかと誘われ、出向いた。そこでは焼絵の羽子板を作っていた。元は電車、汽車の挽物玩具を作っていたらしいが、どこからか注文を取り、当時流行の焼絵羽子板を手がけたものとみえる。そして小田原で関東大震災に会う。十八の歳のことだ。歩いて根岸の家にたどり着くと家は燃えていた。震災後のドサクサでは、蒔絵など商売にならず、日暮里で絵師募集の貼紙をみた時とびこむ。仕事は焼絵の羽子板だった。あつ、これなら出来るかと絵筆を奮う。一日二十五銭というのが腕があるので、一週間で一日一円になったという。絵師を求めた羽子板屋

とは伴野氏ということである。震災後も日本画を続け、十畝氏の弟子一門による読画会の展覧会に出品したりした。しかし、だんだんと羽子板の世界に行っちゃったんだなあと語る。羽子板とは因縁があったということだろうか。

桜井春山らの、これはという押絵羽子板には、山本さんが裏絵をつけてきた。狂言の張りのある役者の顔が描ける人達も、一筆描きの附立はいけないようだ。押絵羽子板を裏から支え、心憎いことをしてきなから、山本さんはいう。「おもちゃの小さいのをやってる方が暢気でいいよ。」あっさりしたものだ。夫婦で力を合わせ、簡便な方法で、たくさん、きれいなものを、あくまで安く作って満足している。床の軸には、大根の墨絵に添えて自作の句が詠まれていた。

色白で

ちょっぴり辛きの

甘さかな

○

現在、かちかち羽子板にはこの他、茨城県水戸の焼絵羽子板、栃木県佐野の水絵絵具による刷絵羽子板、そして埼玉県川越の厚紙に印刷したものを貼った絵貼羽子板の三種がある。『羽子板』で紹介されていた当時のものは、中原淳一の絵に似せたものが多く、それらと比べ今の羽子板は、少女がより幼い顔になっていることに気づかされる。

ところで羽子板には、大人の趣向に適う押絵羽子板と、子どもがきれいと自ら選ぶおもちゃの羽子板とがある。技巧を忍ばせ作りなした、洗いな品のある押絵羽子板は、大人の目はひき寄せても、子どもは、目の大きな、色鮮かに色どられた安手の羽子板に心がそえられる。子どもの世界を見渡すと、羽子板に限らず、他のおもちゃ、絵本、洋服など、原色の派手な色彩がたつぷりと使われているのに気づかされる。淡い中間色ではなく、どぎついとさえ感じさせるそれら子ども用の品々は、品位のない、俗悪なものとして、大人たちの肩をひそませる。

けれどもわたしの子どもの頃を思い返してみると、赤色や桃色、そして牡丹色こそは、夢の世界にひきこまれるよううつくしい色であった。幼いその日に、リアンの色糸を宝物といつくしんだものは多かろう。リアンに限らずビーズ、千代紙など、きれいなものをこっそり集め、秘めやかにうち眺め魅されてい

た。そこには確かに、子どもの美しさの感覚が働いていたにちがいないのだ。

電車を二駅乗ると、もう遠いところに来てしまったと感じ、夕方暗くなるとその日の出来事は彼方うしろの時の淵に溶けていった。何という小さな世界だったのだろう。クレオンは十二色もあれば、この世のもの全てを色づけするのに十分であり、二十四色のクレオンなどもあました。子どもは茫茫たる世界を前に、鮮やかな刺戟でのみ紡がれた、感覚のシエマとでも呼べるものを内にもっているのだろうか。そして大人からはいい顔をされないとしても、色鮮かな原色こそはそのシエマの大切な織り糸ではないかと思われる。

年末の羽子板市をまわり、押絵羽子板は徒らに華やかなものが多くなりすぎているように思われた。おさえのきいた簡雅の趣のものが甚だ少ない。もしこういったものがよく売れるならば、大人の側の好尚に変化が生じているのであろうか。子どもの世界と大人の世界がきつちりと羽子板にあり続けることを望みたい。最後に、子どもの美しさの感覚の図柄を長年にわたり羽子板に写し出してくれた山本さんはじめ、かちかち羽子板製作の皆様に、わたしの子ども時代の懐しさをこめて、ここに感謝の気持を表したい。